

我孫子市の環境要素 水辺



我孫子市は、利根川と手賀沼という2つの大きな水域によって南北から挟まれています。我孫子市の南側に位置する手賀沼は、最大でも深さ4mほどの浅い沼です。沼には漁業のための定置網や杭が設置されています。かつて沼の水中に生育していた水草は、現在ではほとんど見られません。湖岸にはヨシ・ヒメガマ・マコモなどの植生が広がり、オオバンやカイツブリなどをはじめ、様々な生き物の生活の場所となっています。



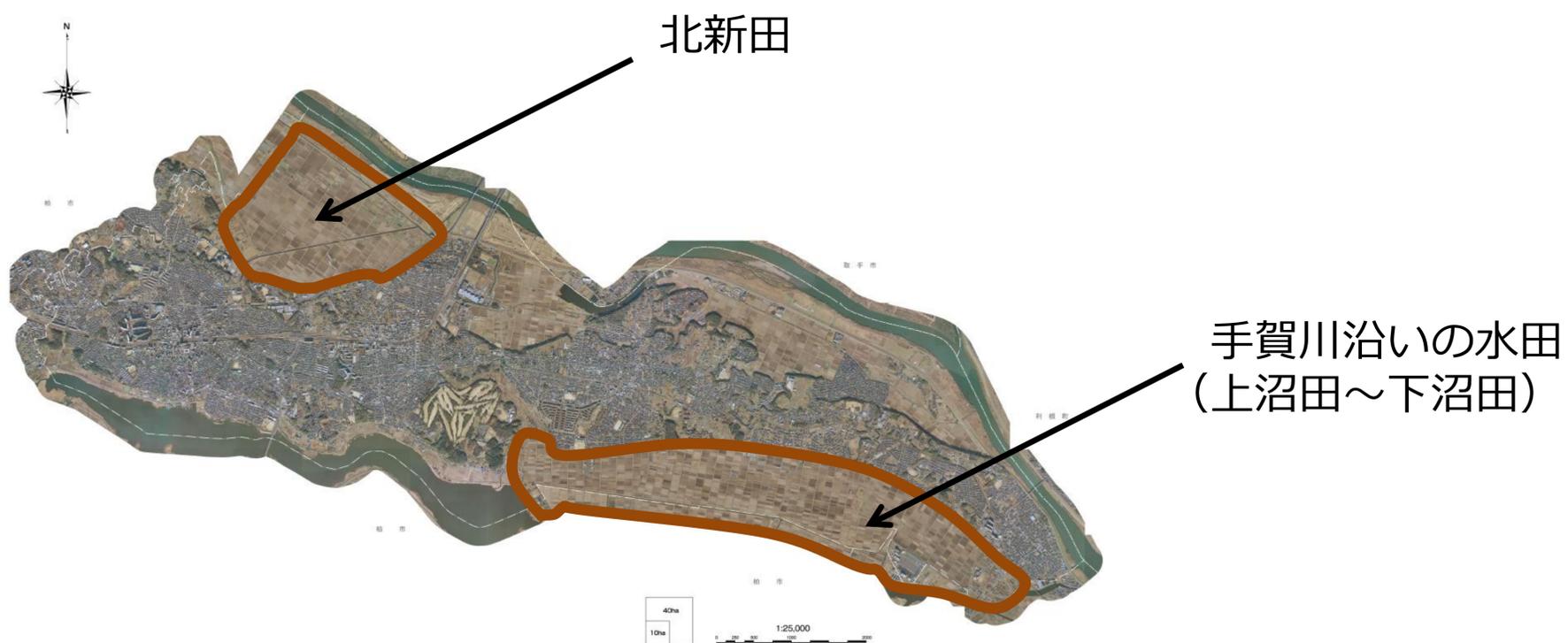
▲手賀沼の下沼から上流側をのぞむ



▲中峠付近の利根川の流れ

利根川は川幅200mほどで我孫子市の北側を流れています。河岸にはヤナギ類など水辺に生育する樹木を中心とする樹高の高い林ができていて、手賀沼の水辺とは少し異なります。草地は少し乾いたところに生育するオギやセイタカアワダチソウが中心です。川沿いの堤防には丈の低い草地が広がっています。かつての流路である古利根沼は、周りを木立に囲まれています。

我孫子市の環境要素 農地



利根川の遊水地となっている北新田と、手賀沼を1950年代に埋め立てて造られた手賀川沿いの地域が最も広い農地です。水田は、季節によって著しく環境が変化します。水田の耕作が行われる4月から10月には、水が入れられて湿地となります。特に、田植え前と稲刈り後にはシギ類やサギ類などの水鳥の生息に適した低い草丈の湿地環境が出現します。一方、それ以外の時期には水が抜かれ、乾燥した環境になります。



▲稲刈りが終わり二番穂が伸びた水田



▲秋耕が行われ、乾燥した冬の水田

最近では、秋の稲刈りの跡に水田を耕し、稲の二番穂などを土にすきこむことが多くなっています（秋耕といいます）。こうした環境では草の生えない裸地でも生息できるヒバリやツグミなど一部の鳥しか見られなくなります。また、カモ類やホオジロ類の餌となる落ち穂が減るため、鳥のよい採食場所ではなくなってしまいます。

我孫子市の環境要素 林・台地



緑の線で囲ったエリアが
斜面林と台地を併せた部分

我孫子市の林の多くは、低地と台地をつなぐ斜面に残っています。林はシラカシやシロダモなどの常緑樹と、ケヤキやエノキなどの落葉樹が混ざって生育しています。樹高が20mほどの高さになる林も多く、常緑樹林の林床はやや暗くなっています。鳥の種数はそれほど多くありませんが、渡りをせずに一年中みられるエナガやコゲラ、夏に渡来するキビタキやホトトギスなどが生息しています。



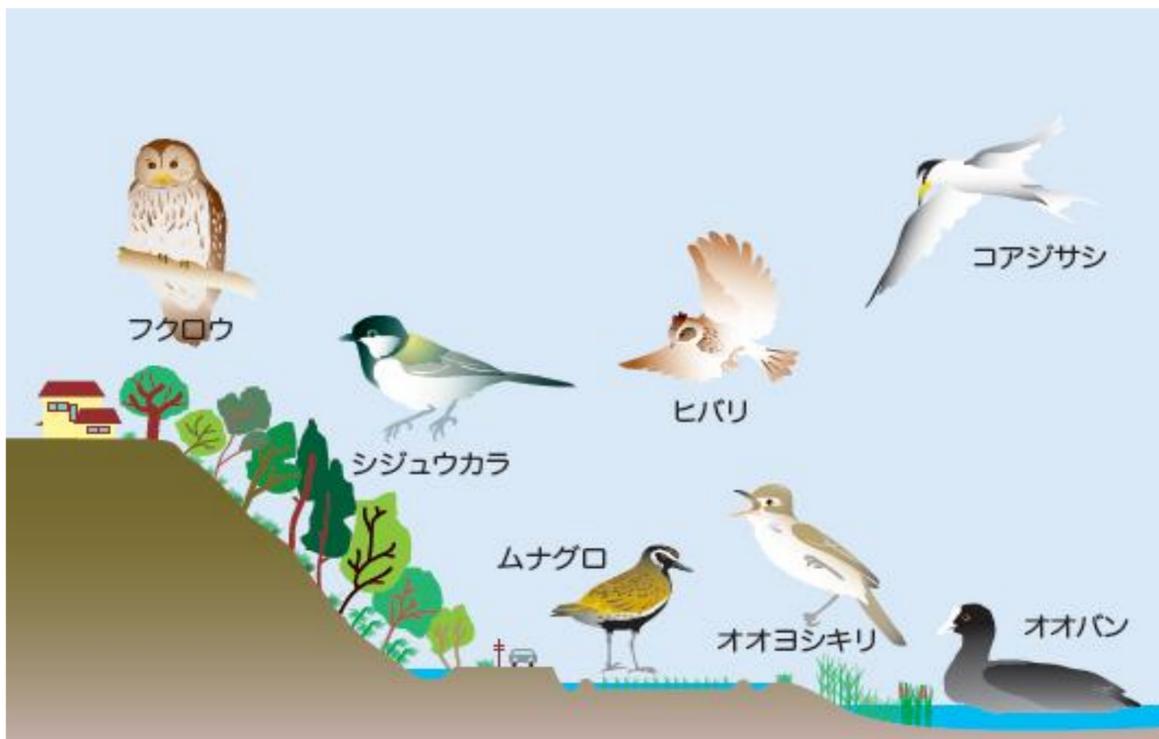
▲住宅地の中にある小さな緑地



▲台地上の畑

台地は、主に住宅地や畑として利用されています。航空写真を見ると、そのほとんどが住宅地として開発されていることが分かるでしょう。緑地は台地の縁にある斜面林と公園などに点々と残るのみです。住宅地では、住宅の隙間や、住宅の庭の植え込みで繁殖するキジバトやヒヨドリなどの身近な鳥が生息しています。台地にある畑は、草地や林の縁を好むモズやホオジロなどの生息地になっています。

我孫子のエコトーン



我孫子市の環境を模式的に示した図。水辺から台地まで、多様な環境が集まっていることが、生き物の多様さと関係しています。

ある環境と異なる環境が接する部分をエコトーン(移行帯)と呼びます。エコトーンでは2つ以上の環境要素が隣り合っているため、1つの環境要素だけの場所に比べてより多様な生き物が生息することができます。我孫子市は水辺→農地→林→台地という環境が連続的につながっているため、それぞれの境界はエコトーンとなっています。



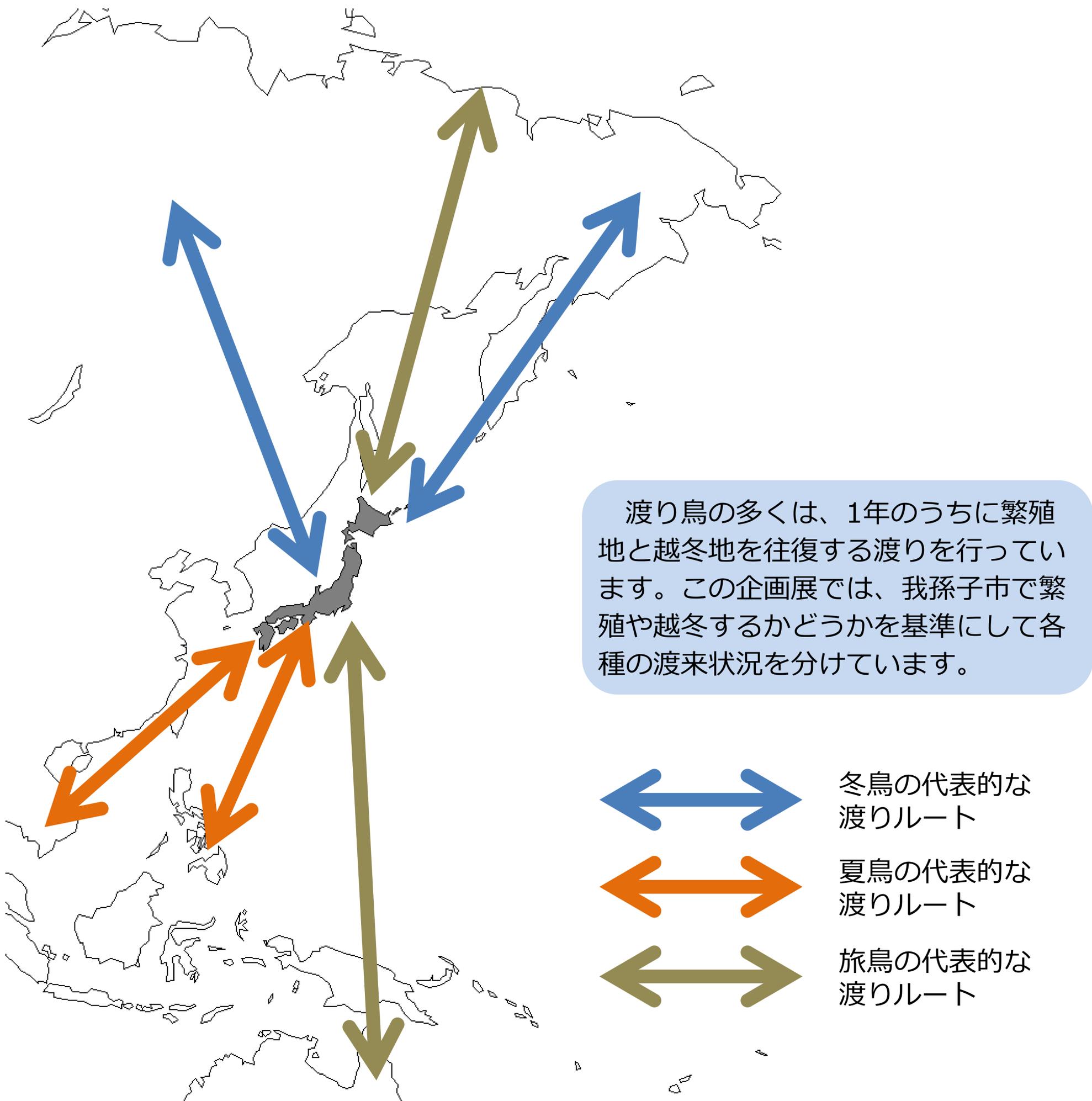
▲手賀川沿いの開けた水田



▲岡発戸の谷津の林に囲まれた水田

人間の目から見れば同じように見える水田も、どこに位置するかで、鳥たちにとっての好まれやすさは変わってくるようです。たとえば、両側を林に囲まれた谷津田は、サシバやアオジなどに好まれます。しかし一方では、サギ類やシギ・チドリ類はこういった水田にはあまり入らず、より開放的な環境を好む傾向があります。様々な環境の農地を残していくことで、より多様な種が暮らしていくことができるのです。

渡り鳥の渡来区分と留鳥



留鳥(りゅうちょう)：一年中見られる鳥

冬鳥(ふゆどり)：冬になると主に北からやってきて越冬する鳥

夏鳥(なつどり)：夏になると主に南からやってきて繁殖する鳥

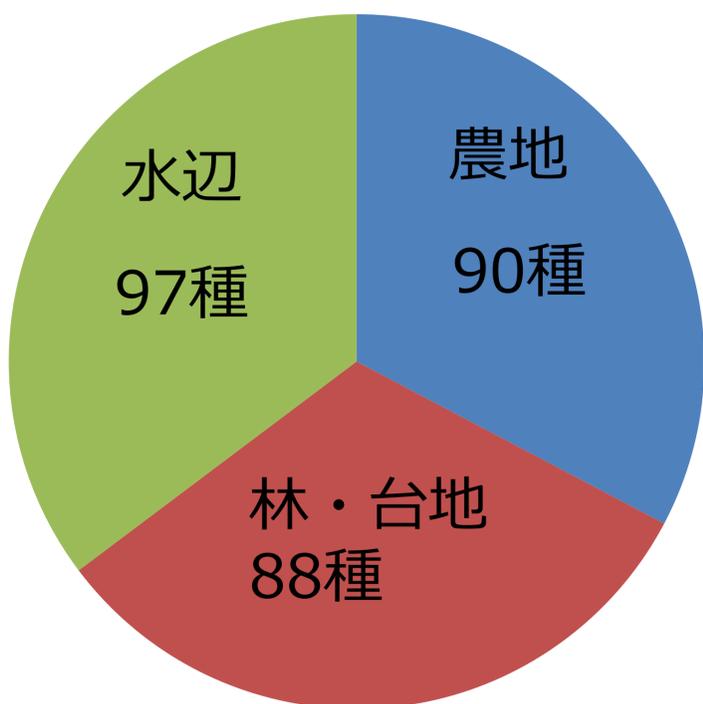
旅鳥(たびどり)：渡りの途中に通過する鳥

迷鳥(めいちょう)：本来の生息場所やルートから外れて見られる鳥

1年中見られる留鳥の中にも、ヒヨドリやカルガモなど、季節的な移動を行う種が多く含まれています。

我孫子の鳥類相の特徴

環境ごとの種数

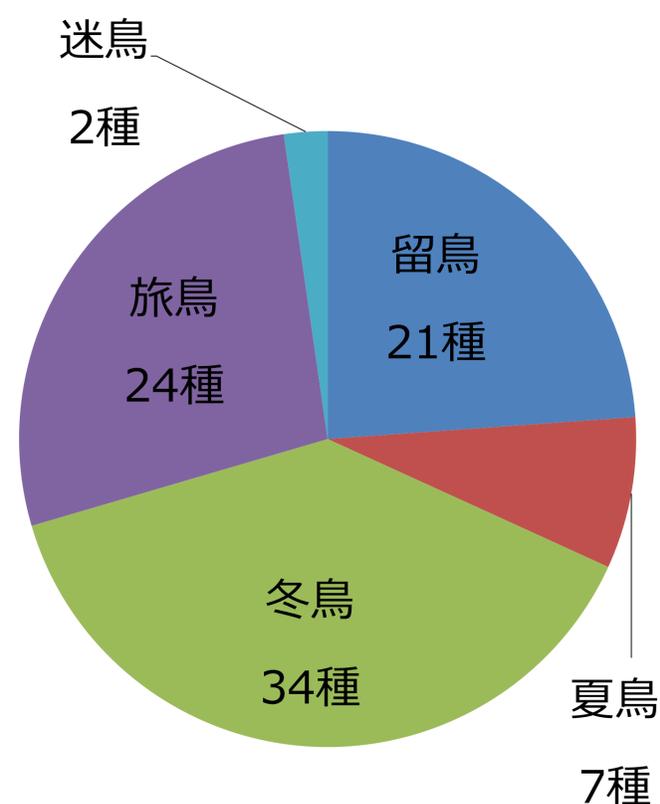
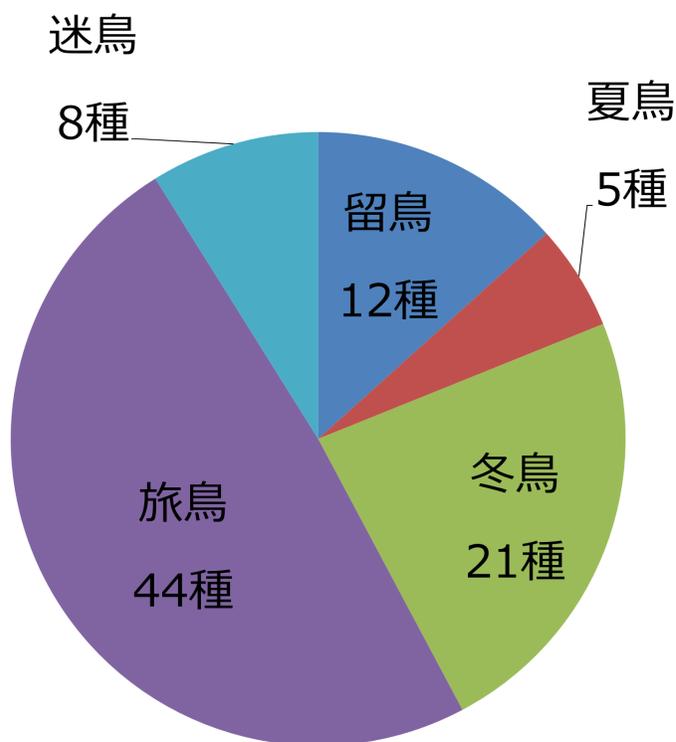
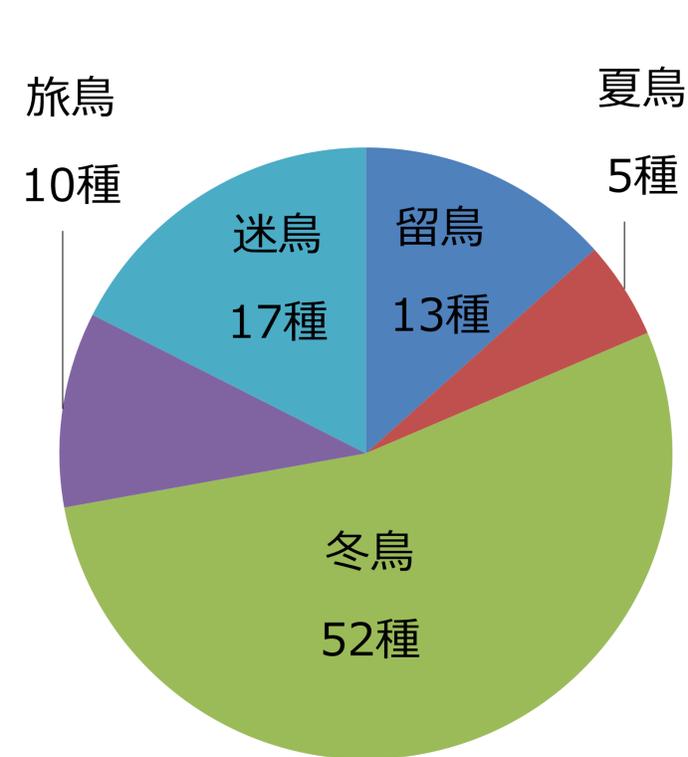


我孫子市の環境要素を大きく3つに分け、記録のある鳥が主に生活する環境ごとに割り振ってみると、水辺の環境に生息する鳥は97種、農地では90種、林・台地では88種でした。

水辺の鳥

農地の鳥

林・台地の鳥



我孫子市全体での渡来区分で比べてみると、最も多かったのは冬鳥で合計107種でしたが、繁殖する夏鳥の種数は合計17種と少ない結果になりました。これを環境別に細かく見てみると、水辺の鳥では冬鳥が多く、農地の鳥では旅鳥の割合が高いことが分かりました。これはそれぞれカモの仲間とシギやチドリの仲間の種数が多いことが原因の一つでしょう。また、林・台地の鳥では留鳥と夏鳥の比率がやや高いことも分かります。全体としては、冬に種数が多く、旅鳥が多いことが我孫子の鳥類相の特徴といえるでしょう。

我孫子に生息する 絶滅危惧種の猛禽類



▲下沼上空を飛びながら探餌するチュウヒ

チュウヒは水辺のヨシ原や農地に生息する猛禽類で、我孫子市では手賀沼や周辺の水田で主に冬に見られます。環境省のレッドリストでは絶滅危惧 I B類に指定されています。手賀沼周辺では顕著に減少しているというデータはありませんが、ねぐらのとれる沼周辺のヨシ原や餌のとれる農地を保全していくことが重要でしょう。



▲カエルを捕まえて道路標識に止まったサシバ

サシバは谷津田と呼ばれる林に囲まれた水田を代表する鳥類です。カエルやヘビなどを主に餌とするため、こうした生物の減少に伴い全国的に数を減らしています。手賀沼の北側の谷津でも近年では繁殖が見られなくなりました。餌生物の多い谷津田の環境を復元し管理していくことが重要だと考えられます。



▲オオバンを捕えて食べるオオタカ

オオタカは主に鳥を餌にする猛禽類で、手賀沼周辺の林でも少数が繁殖しています。その個体数は増加していると言われてはいますが、過去に比較可能なデータが乏しいため、個体数の正確な変化を調査するのは難しいのが現状です。本種の存続のためには狩りをする環境と営巣できる林の環境の両方を保全していくことが必要でしょう。

手賀沼で越冬するオオセッカ



▲繁殖地でさえずるオオセッカ

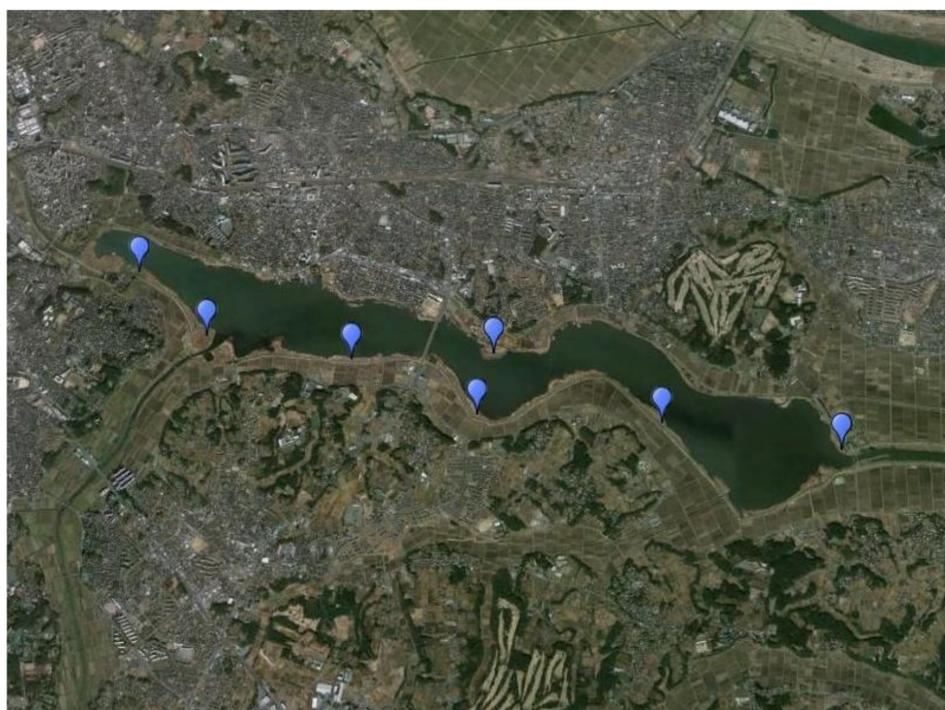


▲スゲなどの下層植生のあるヨシ原を好む

オオセッカは東アジアにのみ分布する希少種で、環境省のレッドリストでは絶滅危惧 I B に指定されています。日本では青森県、茨城県など一部の地域でしか繁殖していません。水辺の草地に生息し、越冬期には渡りを行い分散します。冬にはほとんど鳴かず目立つ所に出でこないことから、分かっている越冬地は多くないのが現状です。



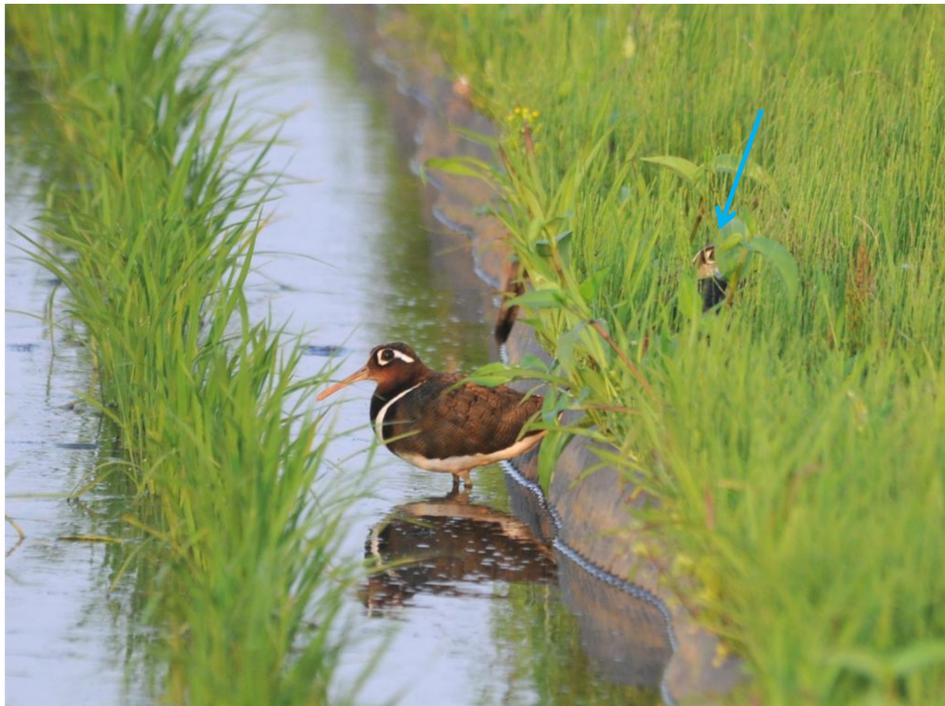
▲手賀川のヨシ原で捕獲されたオオセッカ



▲これまで手賀沼で確認された地点

鳥の博物館では、2015年2月の手賀沼水鳥調査の際に、手賀沼下沼の南岸で本種の地鳴きを確認し、手賀沼でも少数が越冬していることを初めて確認しました。また、2015年11月に手賀川で標識調査中に本種を捕獲しました。今後、手賀沼や我孫子市内での越冬状況について詳しく調査していく予定です。オオセッカの保全のためには、好まれる水際のヨシ原の環境をできるだけ保全することが重要と考えられます。

水田で繁殖するタマシギ



▲タマシギのつがい。雄は草の中にある(矢印)



▲休耕田で採食する父子。よく見るとヒナがいる

タマシギは水田で一年中見られ、繁殖するシギの仲間です。雌は卵を産むと卵やヒナの世話を雄に任せて、次の繁殖相手を探すという変わった生態を持つ鳥です。水田環境の変化などが原因で全国的に個体数が減少し、環境省のレッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。かつては手賀沼周辺の水田でも普通に見られる鳥でしたが、現在では個体数が減少しています。



▲3羽のヒナが巣立った休耕田の巣と未孵化卵



▲水没してしまったため放棄された巣

手賀沼周辺では、耕作をしていない草の生えた水田きゅうこうでん（休耕田といいます）で繁殖するタマシギが多いようです。しかし、不安定な環境ゆえに繁殖の失敗もかなりあるようで、抱卵中の巣が捕食にあったり、水田の水位の変化によって水没した例が観察されています。本種がどのような水田環境を好むかなど分かっていないことが多く、保全のための生態の解明が必要です。

農地や河川敷に生息するウズラ



▲雪の日に農道の上でねぐらをとっていた



▲ウズラが好む丈の低い草地

ウズラは小形のキジの仲間、丈の低い草地の環境を好みます。この仲間としては珍しく、長距離の渡りをするのが知られています。かつては全国に広く分布していたため、古くから日本人に親しまれてきました。近年では生息環境の減少に伴って個体数が激減し、2014年に狩猟鳥の指定から外され、環境省のレッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。近年でも減少に歯止めがかからず、野生からの絶滅が危惧されています。



▲農地から飛び立った2羽のウズラ



▲一度草の中に隠れると、見つけるのは困難

我孫子市では、春と秋の渡りの時期に一部の農地や河川敷でさえずりが聞かれたり、姿が確認されています。また、少数は越冬期にも観察されています。ウズラは農道の脇の草地や草丈の低い二番穂の伸びた農地で見られることから、こうした生息地を保全していくことが重要でしょう。

減っている身近な鳥たち



▲かつては手賀沼にも多く渡来したホシハジロ

ホシハジロは、近年国内の個体数が急激に減少しています。ヨーロッパでも同様に、昨年に国際的な絶滅危惧種のリストに初めて掲載されました。手賀沼には1940年ごろには毎年数百羽が渡来していましたが、近年では年に数羽が越冬するのみです。本種の餌となる水草のある環境の復活が、減少を止めるために必要でしょう。



▲世界的に減少しているカシラダカ

カシラダカは、冬に農地や林に渡来するホオジロの仲間です。絶滅危惧種の指定は受けていませんが、最近、個体数がこの30年で80%ほど減少したことが明らかになりました。越冬環境の変化が原因の一つといわれています。我孫子市では谷津田や広い水田地帯でまだ群れが見られますが、今後の個体数の変化に要注意です。



▲ほとんど声が聞かれなくなったアオバズク

アオバズクは、夏に渡来するフクロウの仲間で、全国的に渡来数が減少しています。巣を作るうろのある木の減少、主な餌となる大型の甲虫類の減少が原因ではないかといわれています。我孫子市では1970年代には市内各地で繁殖が確認されていましたが、近年では渡りの時期に通過するだけで確実な繁殖例はないようです。営巣環境と採食場所の確保が課題でしょう。